

文房四宝

資料提供

(株) 小津商店

【第二十回】「和紙の可能性」

◇はじめに

書道において欠かすことのできない文房四宝(筆・墨・硯・紙など)について、基本的な知識を中心に連載しています。第十五回(令和七年六月号)では、紙のサイズとその保存方法を解説しました。今回は、和紙が秘めている、さまざまな可能性について述べます。

◆生活を支える「和紙」

昔に比べると、私たちが和紙を用いる機会は非常に少なくなりました。かつて和紙は日々の暮らしに欠かせないものでしたが、生活の西欧化が進み、これまで和紙で作られていたさまざまなものが、安価で扱いやすい洋紙に代わってしまったことも大きく影響しています。

しかし、それでも和紙は姿形を変えて現在も活用されています。日本の伝統と文化、そして暮らしを支えてきた和紙。知っているようで、その使われ方は意外と知られていません。

そこで今回は、日本が誇る「和紙」の性質や可能性について改めてご紹介いたします。

■和紙の歴史

和紙は日本で古来より発達した独自の紙の総称です。和紙の始まりは諸説ありますが、約1400年前に中国大陸から奈良時代の日本に伝わったといわれています。原料は靱皮繊維(木などの植物繊維)と清らかな水です。伝統的な製法で漉かれた日本の紙は美しく強靱で、質の高いものでした。

当初はすべて手漉きでしたが、時代が進むと機械の製法も確立してきました。明治初期には、西欧の技術も導入され「洋紙」が誕生します。「和紙」という呼称は、この「洋紙」に対して生まれた言葉です(詳細は令和六年八月号掲載の第五回「紙の歴史と変遷」をご参照ください)。

和紙は長い年月、職人たちの工夫と改善が重ねられて、時代の中で変化しながらも高い品質を保ち続けました。そして、紙漉き職人からは人間国宝が誕生し、和紙の製造技術は2014年にはユネスコ無形文化遺産に登録されました。

■和紙の魅力

「和紙は美しく温かみがあり、品も感じられて大好きだ」という方が多数いらっしゃいます。また、和紙は書く、折る、切る、貼る、染めることもできる、軽く丈夫で、柔軟な素材でもあります。近年は、海外でも大変人気があり、世界中で大いに活用されています(後述)。

また、一般的に知られている和紙を使った製品には、障子や襖、便箋や封筒、行燈(写真1)や和傘、張り子に風、書道用紙など、人々の生活に役立つものが多くあります(写真2)。特に行燈は和紙を用いると独特な光の反射によって、やわらかく優しい光を放ちます。

■和紙の優れた性質

和紙の持つ性質として、薄く耐久性に優れ、保存性が高いことなどが挙げられます。特に保存性の高さを象徴しているのが、奈良時代の戸籍が書かれた当時の和紙が現存していることでしょう(写真3)。これらの性質を生かして、



【写真2】暮らしの中のさまざまなものに和紙が用いられている



【写真1】和紙ならではのやわらかな光を放つ

多様な分野で和紙は活用されています。その保存性の高さがわかる一端をここでご紹介します。

■紙幣に適した和紙

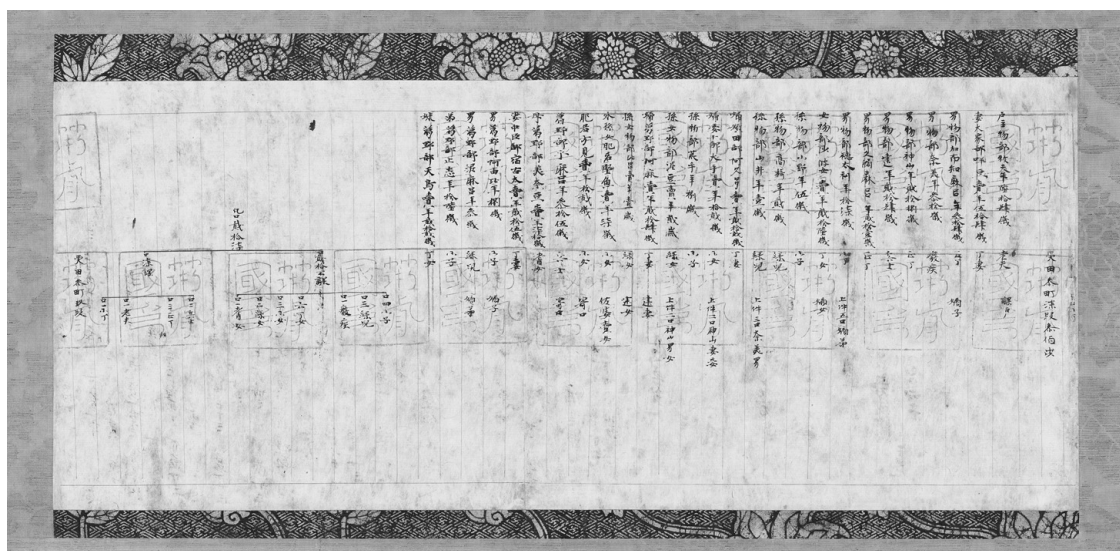
ご存知かもしれませんが、紙幣は和紙でできています。印刷技術が発展した明治時代に、越前の紙漉き職人が和紙製造の技と西洋の印刷技術を組み合わせ、現在の紙幣として採用されている、新しい和紙を生み出しました。何度折っても破れにくく、水に強くて耐久性に優れた和紙は、紙幣に最適の素材といえるのです。

■文化財修復での活躍

文書や絵は時間が経つと破れやシミが出たり、保管場所が悪いと虫食いで穴が空くなど、劣化は避けられません。そこで和紙の出番です。

和紙は「軽くて丈夫、水にも強い」という特性を生かして貴重な古文書や文化財の修復に活用され、破れた箇所を繕ったり書物全体の補修に用いられています。また、美術品や工芸品、楽器の修復などの芸術分野においても和紙が採用されることも少なくありません。

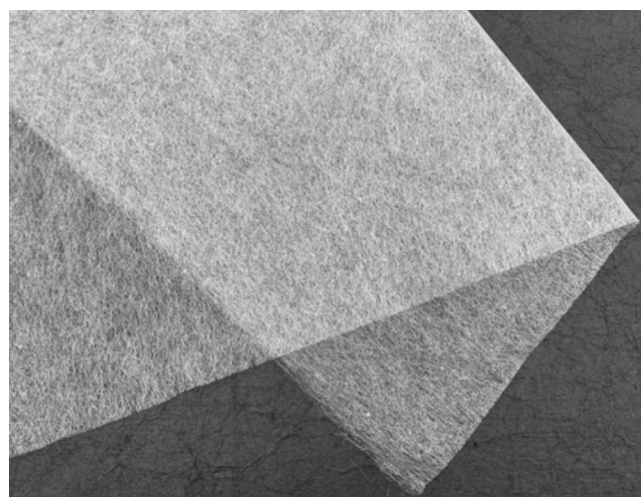
文化財の補修にはさまざまな和紙が使用されますが、主に「典具帖紙」と呼ばれる厚さ0.02mmほどの、透過性の高い大変薄い和紙が使用されます（写真4）。これを、補修する文書など



【写真3】奈良県の正倉院に保管されている「筑前国嶋郡川辺里戸籍断簡」
※出典：ColBase (https://colbase.nich.go.jp/collection_items/narahaku/871-0?locale=ja)



【写真5】重ねた和紙は薄いので文字も読める



【写真4】土佐典具帖紙は文化遺産に登録されている

■和紙と環境

ここ数年、日本を含め世界中で異常気象によ

近年の酷暑でも不快感を和らげる最適な素材として、注目されているところです。

和紙は燃ると糸になります。「紙の糸」は江戸時代から存在していますが、近年では抜群の通気性と湿潤性を生かしシャツやジャケット、靴下、タオルなど、形を変えて現代の生活でもいろいろと活用されています。吸湿性に長けていたため手触りもドライでサラッとしており、

■和紙と衣服

和紙は燃ると糸になります。「紙の糸」は江戸時代から存在していますが、近年では抜群の通気性と湿潤性を生かしシャツやジャケット、靴下、タオルなど、形を変えて現代の生活でもいろいろと活用されています。吸湿性に長けていたため手触りもドライでサラッとしており、近年の酷暑でも不快感を和らげる最適な素材として、注目されているところです。

和紙による修復技術は世界中で行われています。アメリカのワシントン国立公文書館をはじめ、ルーブル美術館、大英博物館など、和紙は世界中で活用されています。公文書などの保管はデジタル化が進められていますが、メディア（記録媒体）の劣化や再生機器の消滅など懸念材料も多いため、和紙で修復した「原本」の保存は、依然として重視されています。

「重要なものは和紙で、残したいものも和紙で」といえる充分な実力を和紙は有しているのです。



【写真6】再利用可能な和紙は、環境に優しい素材として活用されている

る災害が多発しており、我々の生活も以前とは大きく変わってきています。

リサイクル（再利用）やサステナブル（持続性）、SDGs（持続可能な開発目標）といった地球環境への配慮や、次世代への負担軽減を考えた取り組みも盛んになっています。そのような考え方の中で、過去から現在まで大きく作り方を変えず、天然由来の原料で作り続けてきた和紙は、再生が可能で生分解性（自然界に還る性質）にも優れており、環境や体への負担が少ない、理想的な素材だともいえます（写真6）。

今なお新しい可能性を秘めた『和む紙……和紙』は、柔軟に変化しながら、我々の生活と心を豊かに支えてくれる大切な存在なのです。

【参考文献】

- ・和の技術を知る会著『和紙』
文溪堂、2015年
- ・『和紙の手帖』わがみ堂、2014年
- ・久米康生著『産地別 すぐわかる和紙の見わけ方』

東京美術、2003年

・久米康生著『和紙文化辞典』

わがみ堂、1995年

・『デジタル時代 和紙脚光』

読売新聞 2025年5月6日 朝刊 P24